

Kodak

LICENSED PRODUCT

Black

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

White

3/Color

Centimetres

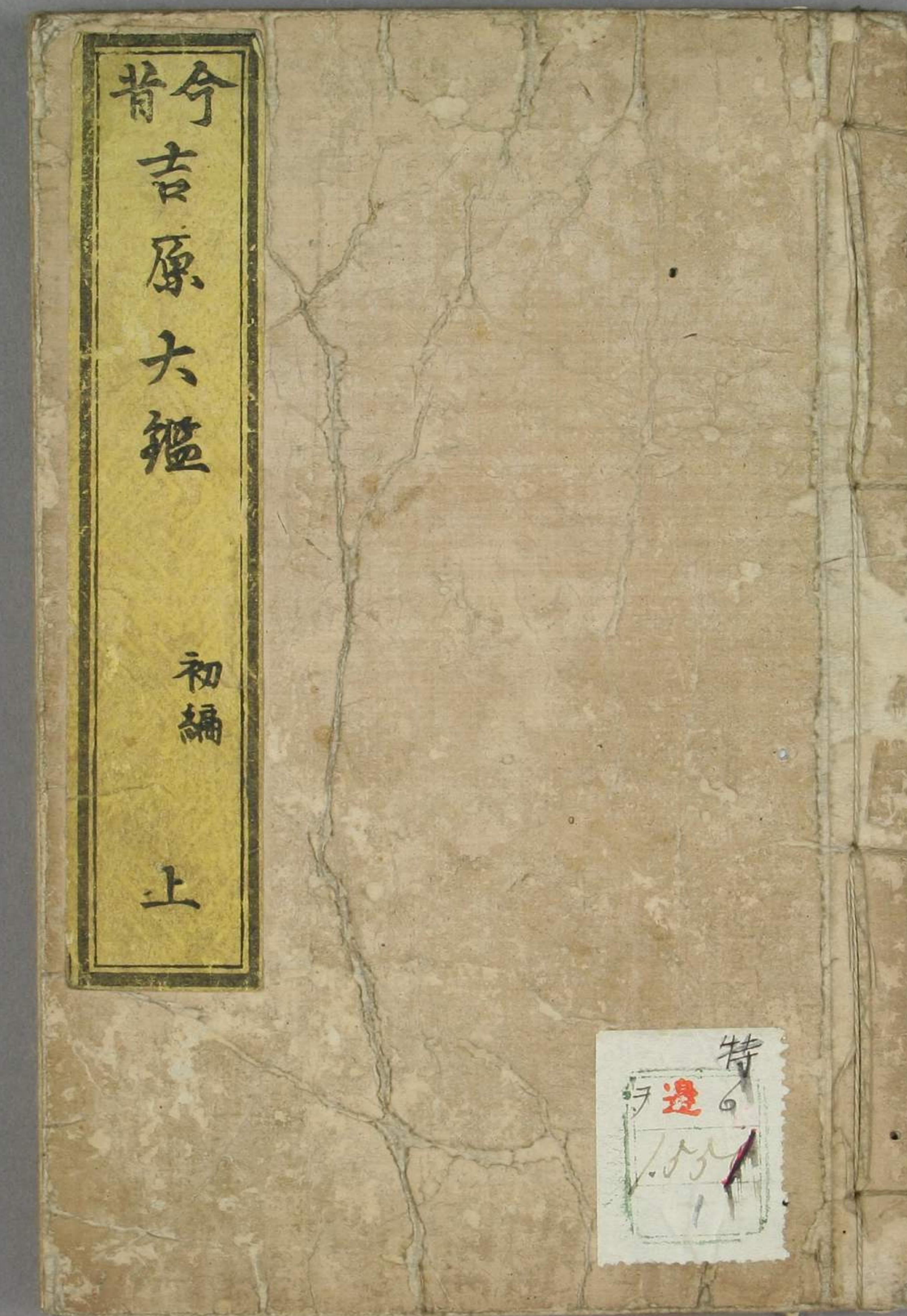
Blue

Cyan

Green

Yellow

Red



吉原大鑑初編月鏡		
○	言高園基の源第	○ 五町の名の體と
○	丁と富士聲	○ 二本堀の文字
○	斤葉の芦	○ 左辺
○	五十間表坂阪	○ 田面引燈
○	編笠茶や	○ 見返り複
○	通ふ神の社	○ 水吐尾辻間敷
○	轍具外仲野巨細	○ 大門番人規定
○	散茶	○ 弓長屋の名
○	端女郎	○ 格子女郎
○	小格子	○ 刃女郎
○	切見世	

大保七甲子年正月
夜書一束

あくまでもうまくいよいよおまか
とあるが事もあらゆる。それの方
もあくまでもうまくいよいよおまか
けであります。それで今度もとつまん
せぬまでもうまくいよいよおまか

新造
雇兎

不寐番

昼夜見世

初會裏三令

薄雲傳

薰傳

大隅傳

九重傳

懲花傳

居続

引ヶ

若者

後朝

願三ヶ条

諸説百物語

濃紫傳

辯

紀文傳

丸

吉原大鑑初編卷之上

東都 豊芥子撰集

○折涉爰地遊廓の始より大橋柳町所のうち 鐘くら
河岸堀町京橋角町など二十軒のうち十四五軒が小外
所とよ二軒三軒で又無代用を高賣せしるみそのうち
庄司甚右衛門とりより生豆とて相列小田家のものにて年々
あるて江戸へまう柳町より下りてお駄目と云ふ繩島あれ
何とぞ定まつて傾城町を起立せんとぞとぞ

公儀へ以相のヤよすみ通はるま七十一年 公命代ひ
東南の海陽より薩摩朝敵と二十里方程のうちもの
薩摩の事成さざれとわざとて沼をうづめを築て
けりより薩摩と名付て元和三年より零度より
同四年裏月よりあて一月の足をもとたきを益
があつまう

○六丁町となりて六丁町一丁目二丁目京町一丁目二丁目
角町より六丁町と名付へ玉劔集頭麻町を起し
しものと 市代長之率ひ其の餘光をかうむり此

曲輪ちを轟うせ壁ひそひ戸町と号ひる此町へ折町の
領地や三間五步余地ひらへ 宮内省書院 二丁目へ移軒に
よ住るのり移る京町へ移軒よ住る近隣やひれ
移るときひきあひかくまつての馬の馬の京町と名
づく四二丁目めまほしのへあ良のちんみとあひのま
旗御町岡基のよし伏すて上方よりかく下アそその
町へ集まるあり町へ一五年ゆかしく町役らぐる年々ふ
新町とゆく角町へ名爲角町の文書や十軒ぞうり引
うひつて住居なるへ坐すの名を冠ひと云

○明暦二申年十月元吉永町場西惣の修葺と
内壁代地キテ浅草町のじつ日本屋のカウ商店の
内めてたまつて死うるもとて吉永町のまちを改め
修繕と界隈のくに植うのをもと方代地にまつみす
多くの下石積木を勢ひてまづ先吉永町ハニ丁四方の場所
一反五十四坪の積りを二丁に二十の場所とせまつり又
邑里の豪農セシ高農業セシ自今以後五年の毎と
免解せらるゝもの上引料として酒全一万五百石と定む
一圓十十四文である所爲に爲めに植るふ因

二年酉正月十八日辰巳の大太亡エ新築セラベリ移りの
る越門を同六月半より界隈の代地へ移りて死よ植うる
但亦伊豆國の内今戸村山谷村を然村ゆく修築
リテある事大約二年半を経て百坪の敷居
四面に土塀六五日の内悉く引積りツメ百坪家也と安底
キテ御用事無しと之を以て一層と三の屋足本と武
義を以て死みて後うる。洋房が主。小屋を主とてより更
と野とやせてもや。洋房は主は土蔵ひよりと二重也
とおどりの様。オホトモえやねとつゝ安底してとあ



「山の間の山門は山門と見ゆるが山門と呼べ
りゆがるあり

○ある郷さとに於おはじて山門さんもんと呼ぶ者もの有あつる者ものの時十文字の
町名まちなにて通称つうしやううる山門さんもんと呼ぶ一か所ところの山門さんもんの事ことなる
やくちのじじ山門さんもんと呼ぶ事ことなりまだ御ごもあつて

○某もしいえ若わらの頃ごろに山門さんもんを以もつて十文字の街まちと
あひて山門さんもんと呼ぶ事ことなりと申いて御ごもあつむ事ことなり
と十文字の街まちと呼ぶ事ことなりと申いて御ごもあつむ事ことなり
やといは大おほき山さん先生せんせい物ものがてらりと云いふ

○日本也有あ下さの方がた一い山門さんもんと呼ぶ者もの有あつる者ものの時十文字の
山門さんもんの事ことなる者もの有あつる者ものの時二ふた山門さんもんと呼ぶ者もの有あつる者ものの時
すこし後あとと見て山門さんもんが山門さんもんせつづけ山谷さんご方がたへ延のびて
る者もの有あつる者ものの時二ふた山門さんもんと呼ぶ者もの有あつる者ものの時

後あと是これ南みなみの方がたを山門さんもん附つき

後あと是これ北きたの方がたを代だい古いそ山門さんもん

右ゆ山門さんもん有あつる行移ゆきよする事こと有あつる成な年とし六ろく月つき七しち日ひ建たて

是これ云い

是これ山門さんもん有あつる行移ゆきよする事こと有あつる成な年とし六ろく月つき七しち日ひ建たて

今いま山門さんもん附つき

往きもあの方をみやれ

従是より方を繰るべし

今テ所附
吉原附

は候本院天町本院を尋ね八十五圓を人綱へ少く方を義
論町を去り西四百圓余分十二町余程の事後名紙洋鷲

御手の石鷲

極むと云ふ

矢和寺より番中をそぞり植木本をあらわすあ路を西へたり
皇室のものうち金の花火を送るが金のつゝちかうすれうきゆう
またお名のうまく

○丘の芦

中庭園之角初 幸井村入其斬の處

○龙迫原

先被滅 又通う根 望うむとすうけ

は根へじき桑引通の一里桜の根うつこ

○五十圓を下り貯金を放逐とりて大门より左の方をされ場

ゆり 畏えのまゝ たりの方をせし處よとすう折ゆり

○固面行炮

是ハちひ打せ西の頭火をもる

○終罪城

康の和の姫を去らるゝの故せよとすう折ゆりと云ふ

生糞の折ゆとりとすう折ゆりは西へに半年をあまびぬ地ゆく
廓中の男女不祥の事と云ふの又は盗賊など捕へて死んでゐる

二日で晦の所となりと云ふ

○大門に折ゆるは廻を走りて大門よりと
ありやまは廻を走りて大門よりと云ふ所を先方

邊古とさう 今かと云ふありとざる

旧名のあれり

○太門よりあはれ屋まである百二十間横百八十間お洋敷約

合七百六十七坪より

○大門よ通入界といひを事。 こほんの度量表

○江戸町 規定

一 東に番人、底一町、一人を賜、番を守人、即ニ室役番、一人
契賃七人、も二年を番役代と申す。是れ、官人役がうち不満拂
業者所、一人を賜、契賃十二人、也、即ニ室役番

て事。 実役半中止とさう

又女のかへりの盐屋とも切みゆゑを とよ おの門をのまき

○江戸町一丁目 国二丁目

糸町二丁目

ひの町の方を
西に裏と見え

○国二丁目 糸町二丁目

角町

は第ニと櫛町といひ
今へと切めて名をさう

仲見町

白子二丁目の

揚坂町

ゆき坂の名をさう

西面岸

ゆき坂の名を西手海裏といひの名をそぞ

東面岸

ゆき坂の名を東手海裏といひの名をそぞ

天神面岸

ゆき坂の名を天神面といひの今ま

弓矢面岸

ゆき坂の名を弓矢面といひの今ま

○井戸をゑ

○猪鳥をゑ

○蛤をゑ

○三月をゑ

○くま寫をゑ

○竹槍をゑ

○ハチワラ

○仲の町たら口もうあは尾まで仲の町とひよ

○七軒 宮下二丁四角すみどり

○待合の辻

○六丁二丁四け

○者市場

魚下と揚や町の

○秋葉山

施篠

施篠

○大又矢食

大社瓦わゆ

○太史

今かふ一と夏かくやひ盆假下のまきみてたお持ふみてみせを

○次捨子

女房とひよ

今かふ候み年々え達

○散菜

益夜合と木と豆と文年中には仲西の季やよ詫文

か豆わく一とまたぐくとの里みわつ石りてその品とこくえ

あみなげてもも事とつとらべのまやふ

あめぞありしるまほの名号が聲方こゑ

○櫻糸

貞吉のまえ福の始めほりまのうを被りて二面よゆ

○金糸糸

つめきを糸うら糸あ流すてつとものゆき見列わけじよども

○豆

後へのちのうの既とくれり古御とよ候子々とくわう又全

○局女房

一分こと清よちうや全分に若まし全二朱とくわう

○切見世

ぬす二寸二寸とくふきとくとくのむきり二寸三寸

○影達

弓ハ室ゆ年中より経てよーもの多大内女房の

事トてると稱すぐいり

○小捨子

こまくらの君と毎のやう

○鴉女房

こまくらの君と毎のやう

○初年

免取もおおまきとひよとよだれ免取もよとよとよと

○毎日づつまきをあへ花車

○寝坐くろび

○丸まる

十人ばかりの里まちにまきはあらむるをあくへに正ただめく
そのまゝやうに年としを考かんそむねるやうに年としを考かんそむねる
あたはてそぞれ年としを考かんそむねるやうに年としを考かんそむねる

○鶴つる

十人ばかりの里まちにまきはあらむるをあくへに正ただめく
そのまゝやうに年としを考かんそむねるやうに年としを考かんそむねる
あたはてそぞれ年としを考かんそむねるやうに年としを考かんそむねる

○

○遣おとす

又の名香車

又花車

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

○

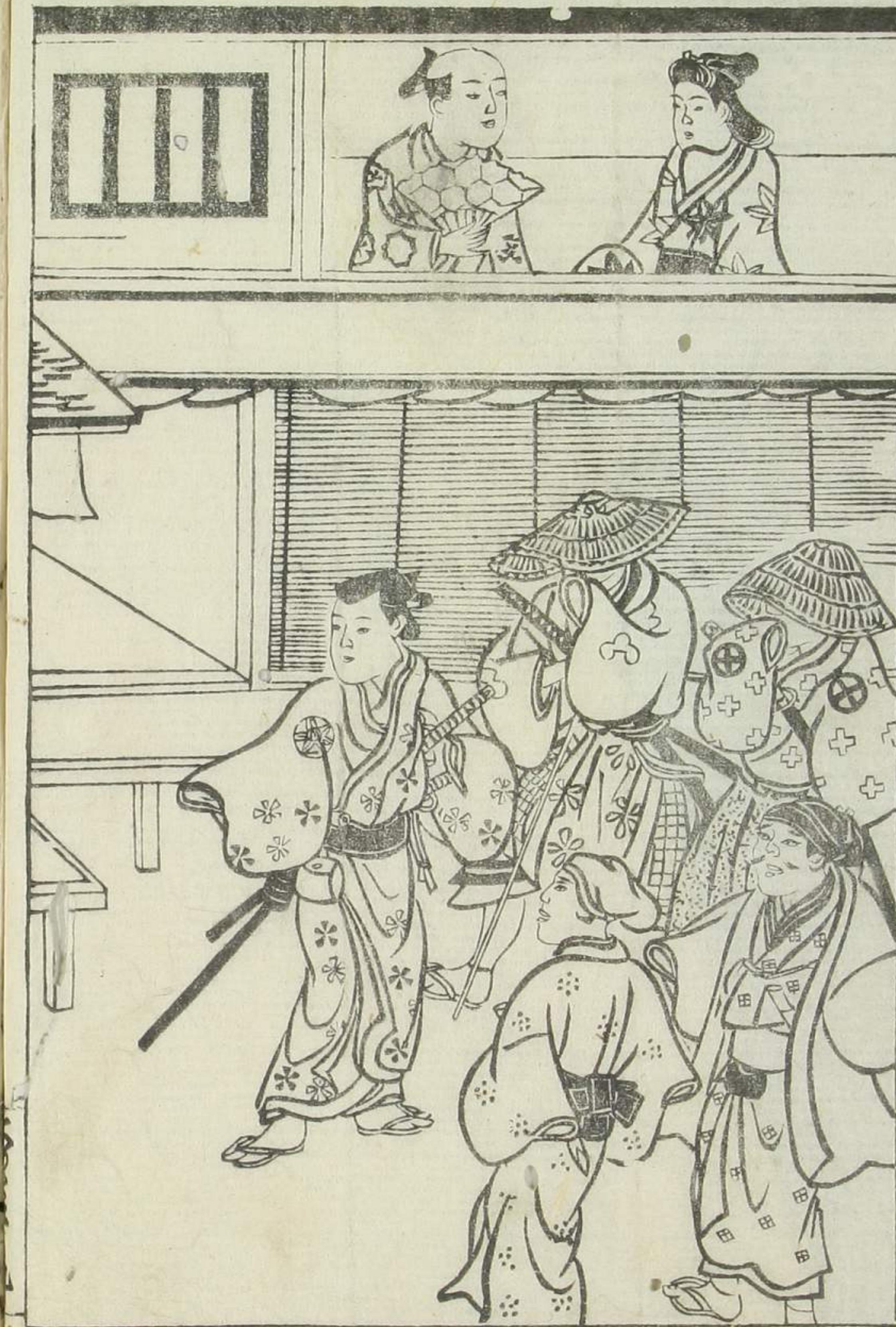
○

○

○

○

○



鷺の巣二条判吉三 無奴。 わふ。 生徒。 五翻。

明かのとうふまんりのゆと三川五島馬ヶ船アリ碁太手

記白石歌よこの名歌加久を後

まを唐歌を歌ひよくとおゆ

益若

益若あ久人の身をあみ度ひがわす一久のわのくに

あくのをまうてい向方ぞと聲びしけれ身もよをやる

えようよをわり身のあくびがくあめとの人益若

大河の豆腐で油揚げゆへしくと身身の懶室

有りうてひづれ今よ身つてもひつまゆふ名歌を考

ひどするにひと身ゆべ

吝哉

吉原太鼓

可遣

且那是

我思首尾佳

不遣卷可懷

論 諧曰君子哉 遠伯五國有道則仕一國無道

則卷而可懷又切者謂不惜金錢也

元文年中童樂先生詩集上載る

益哉

不せゆるより

衣足世

まで衣ひ

足益へゆるあくせく終とゆきこれとコスヰタ一の姓とつ

○見世清檻

あくみとゆのたぐひや人氣とひるぎをあき
の名曲めぐらしが今からいふかと
素ぞとあつりとよるれり

○引

ひきの引付て他のものとの間を括子をあうとせと
あそびのやうにせんざらすかのうとせんざらす

○後胡

かづらひと帰る事
伸一ツ 欠二ツ 夜何時 燃味噌 古茶碗
危知虚云早無憎 物樂極 出門生病悲
居續 画るの日はもととくわう日

二十九条の覚

店の事とあらう事とあらう事とあらう事とあらう事
やあらう事とあらう事とあらう事

一
花女と美女とおおむねを徳りか限てあがめ微とぞ
あらう事とあらう事とあらう事とあらう事とあらう事
あらう事とあらう事とあらう事とあらう事とあらう事
金娘とみやびのへと娘由とみやびのへと娘由とみやび
娘方とみやびのへと娘由とみやびのへと娘由とみやび
金娘とみやびのへと娘由とみやびのへと娘由とみやび
多めりとみやびのへと娘由とみやびのへと娘由とみやび

坐候仕合うと一日一夜のやを度み候やうと坐車

一人死ぬりひめの心あらむはく利根川を越へ今从船にて
萬時山内にかかてもくと匂ひに引く不夜の月あらて
まよ細ちよもう因み野放り僧と度すと名け萬時
萬時妻を云々又お女なるゆへ大す旅食をも海世と
往來せぬのへ人向ひも丁度旅を云々也えども
不思議の娘がお対してせせらぎを云ふ者有り
皆やうなよひよ猶豫無む一石集つゆへ匂ひくわざ
及び出でるゝ娘へ歸て殊仕方形狀のとまきお

老女遊行マードル奉

一泊年せと西舞檻を浴りのちやう湯筋正室病じ事ゆ
まよびぬき自然遠隔紙相ひあはり良の事に瀧
人いのむれぬとくを左ね茶器を掌てて其人目を無
絶ふと云は是海原が一石集めあり候が不捨景
ひのむの事に度て方歳日を度す中右モ二九九
方への老女遊行がうつる事まづて四食を度めば朝く
ひのくやうとあはは友禰と色打禰一チ面立
作舟と申ゆては矣別ら老女游行する所と存するゆ

卷之三
紅樓夢
第五回
金玉良緣
寶玉夢遊太虛幻境
賈雨村判案夢入太虛幻境

おまえの事はおまえ元和二年終り奉る
おまえをひどひく一日一夜とおまえ今おまえそめ色り也
ゆ因切是れせうへる事あらぬありやもくや事あくらひあらき
初令
トおひづる
二令因あらぬあり事あくらひ
やあのもちうりとモ
三令因あらぬがものもちうりとモ不應うり
ゆうてお間のもの強くもちうづたり思ふこと
おまえ

卷之三

一
金主
大足世
一
金主
大足世
一
金主
大足世
一
金主
大足世

おまえの家政事務室へおまづかひ

卷之三

蘇門堂金葉作

むほり一成集あくちあらと花のまよせ

○暮れの 日半籠

夜じのは舌

春うきのや難びー

ゆうふく夜

○舞の もとめの夜

もとめの夜

○月死の 女房の見月

女房の月

○月死の 深の月のあみ

むかし女房の月の深

○月死の

か生まばの月

○月死の

か生まばの月

○月死の あまきとほきと月

あまきとほきと月

隕せんのわづみ

○月死の

あまきの店づけ

内籠のまよ

○月死の

初金よさね月

ゆうわのそゝね月

かの初春の月

小神よおはしたの紋

○月死の月

女郎のよきわい始

りきる女郎

酔ううううりの

あめびのれき

ゆきのそーまき

まやりの弟子

ものとたの

めめやみの藤

ち敵ひよす

みのよきわいの

あややさきむすの様

ゆ中の益基

うきぬ女郎の和日の中

ま

の氣のよきわい

あらこく夜のわゆ

まよまくね切ふ充

むよれのよれの

あでけのわよかわ

まよまくねのよ

のりやくわいの

か年の萬あせ

御簾のさかの簾が引る

あのよあをじ

かのぞかぶ新さん

よだざまわいの

○ 雪の鼻のゆゑ

ぞえがくすみのなどと雪

○ 菊山あらわの

櫻は紙ゆぢ、やゑの一束

す一分の夜雨

賣れぬやうの袖すらの雪

○ 水立たるの

女郎の口吹ての雪

女郎の毛びら

○ うきよたわの

女郎の筋毛だらり

○ むじだらわの

和室の耳そづえ

○ みどりたわの

まきのやゑゆゑ

姉やうの魔せんえ

○ やうとのやえきう

女郎の大に

ふうけまくやゑのひめぢ

○ 猫庵あらわの

ゑかくえ

新あつらわ

ひよのむしの聲

○ げびうらわの

おまくとまくとまく

三人一せりらうもく

サヒシムはくさく

萬方見ひるゆえど

○行らじふらうの

年歴たとけけく

角きの秦入

○東らうきの

あひもももと報をと

引きわなみ

○うそらうたぬ

ひきの源

吉原大鑑初編卷之上終

